

少年剣道部をととした人間形成に関する事例研究

阿部 眞希雄 丸山富雄

キーワード：少年剣道部，剣道の理念，人間形成

A case study of the character-building at junior Kendo club

Makio Abe Tomio Maruyama

The purpose of this study is to prove the hypothesis "Character-building via Kendo".

The following methods were used.

- 1.The idea of the kendo was clarified from various documents.
- 2.The realities of " K junior kendo club " were clarified from the interview.
3. 32 parents of the children in " K junior kendo club " were investigated about the effect of the kendo experience.

As the result, it has been understood that the kendo experience is effective for character-building of children , and is effective also for adults in the confused contemporary society.

Key words: junior kendo club, the idea of the kendo, character-building

1. 緒言

1)問題の所在

現在の社会状況で、一時、大分改善されたと思われたホームレスが、「100年に一度の大不況」と言われる今、更に増えだした。駅にうずくまる、公共の公園等に屯する姿を見て、人々はどう感じるだろうか。社会での敗北は悲惨である。絶望の影が心をおおい、挽回・復活の気力さえ削いでしまう。陥った原因を他責にする声もあるが、陥らない人がいる限り、自責と考える事が妥当であろう。では、今後我々の世界はどうなっていくのであろうか。大人は社会を次代に確かに引き継ぎ、未来を担う青年は迷い無く生き抜き、他の人と手を取り社会を形成し発展させていけるのだろうか。次代を継承していく責任をはたすか否か大きな岐路にたっている。わが国の将来を託す青少年に何を指針にしていくか伝えていく義務がある。では、

何をもって託していけるか。

筆者が、剣道の指導奉仕を行っている「K 自衛隊少年剣道部」において、入部している子供が稽古初期の軽微な運動段階で、不満を言い継続をいやがり退会したり、「楽」を希望し他の団体へ移転する事がある。これから、伸びようという段階で保護者自身も、その状況を認識していながら、子供と十分な話し合いや将来を見越した説得もせず、子供の考え方に安易に同調し、「子供の意思を尊重します」などと「楽」を助長し、子供の将来に結びつかない選択を行い、憂いを覚える事が多々ある。このような親子関係がこのまま年月を重ねていったらどうなるのだろうか。人生のあらゆる場面でどんな選択をするのだろうかと前述と併せ思いを深める。

一方では、親子一体で継続を貫いてきた親子は、相互理解が進み、性格が明るく前向きに変わった、中には自閉症・登校拒否が改善された

等の、喜ばしい事例も見られる。

本研究は、上記を踏まえて、未来を担う青少年を育成する為には、スポーツとは異なる武道、特に「剣道をとおした人間形成」という点が適合しており、その効果には、社会人である保護者と、指導者のあり方が極めて重要であるという仮説を明らかにしていきたい。

2) 研究目的

①著名剣道家の文献や全日本剣道連盟（以下「全剣連」とする）資料から「剣道の理念や心構え」、また「剣道指導の目的や指導上の留意点」などを整理し、「剣道をとおした人間形成」の青少年育成への適合性を検証する。②「K 自衛隊少年剣道部」の指導理念や指導について、前記①の検証結果をもとに、実態を調査し、その妥当性を検証する。③「剣道をとおした人間形成」について、「K 自衛隊少年剣道部」卒部生の保護者へ調査を行い、剣道体験の必要性、効果等について明らかにし、その効果には保護者と指導者のあり方が重要であるという仮説を検証する。

2. 研究方法

1) 文献調査

井上正孝（2003）『人生に生きる五輪の書』、小林信二（1987）『武道のすすめ』、宮本武蔵（2004）『五輪の書、大倉隆二訳』、財団法人全日本剣道連盟（2001）『幼少年剣道指導要領「改訂版」』、（2003）『剣道社会体育教本』、（2008）『剣道指導要領』、等の文献から、剣道の「歴史」「剣道の理念や心構え」「剣道指導の目的や指導上の留意点」などを分析・整理し、「剣道をとおした人間形成」の青少年育成に対する適合性を考察した。

2) 面接調査

「K 自衛隊少年剣道部」の歴史について保護者会 G 会長夫妻に、また実際の剣道の指導については指導にあたっている S 師範にインタビューを行った。

3) 質問紙調査

卒部生の保護者 32 名に対し、入部動機と効果意識について調査を行った。

3. 剣道の理念とその背景

「全剣連」では、剣道の理念を「剣道とは、剣の理法の修練による人間形成の道である」と定めている。この理念が導きだされた背景を歴史的に概観する。

1) 剣道の理念とその変遷

『剣道社会体育教本』（2003）によると、剣道の起源は鎌倉時代に始まる戦いの武術に由来する。戦国時代に入り、当時の大名たちには、自国の繁栄の為に武術に優れた者を召し抱えようとする風潮があり、武術家のなかには名声を得たり、自流存続の為、真剣勝負をも行なった。戦国時代、実戦本意の武術は、「兵法」と呼して、剣を主体とし諸術を統合する総合武術であり流派を編み出していった。江戸時代に入り天下泰平となり、この時代に剣術が後世にまで伝承されていったのは、技法における「型」と心法の深化にあった。宮本武蔵の実戦を前提とした、相手に打ち勝つための「心の持ちよう」についての創意は、「殺人刀・活人剣」を、儒教倫理の社会のなかで広くは「治国平天下」の兵法として、個人においては「修身」の兵法として完成させた。江戸中期の 18 世紀のころ、竹刀と防具が工夫され、武士の子弟が刀の操法を学ぶための、打ち合いや試合が可能な竹刀打ち剣術が始められ、広がりを見せた。幕末には、現代の剣道の考え方の中心をなしている山岡鉄舟が「無刀流の思想」を体系づけた。「無刀流は勝負を争はず」として、その技法の一般化をみなかったことを考えるとき、競技化の進行と理念の間にできてくる様々な隔りを埋めるために、「形の修練」、「剣道講話」などとともに、「気・剣・体」の一致や、一騎打ちの美学を反映する剣道独自の競技特性を通じて、伝統的文化が学習されるようになった。

しかし、『剣道指導要領』（2008）によると、明治維新を迎え武士階級は消滅、佩刀も禁止さ

れて、剣術は修練の基盤を失い衰退期に入ったが、じきに世が落ち着くと、剣術の良さが改めて評価され復活していった。警察において奨励され、高等教育の学校でも活発に行われるようになった。教育面での効果が認識される風潮に従って、剣術、撃剣と呼ばれていた竹刀打ち剣術は、大正に入って「剣道」と呼称される様になる。竹刀剣術による精神と身体の錬成効果を認めての呼称であり、この二点は非常に大事な点であり、社会に根付く現代剣道の発足の起点となるものと言える。

一般への普及も進み、昭和に剣道は国策として奨励されたが、しかし戦時に入り、戦技と結び付けての教育が行われ、後々に禍根を残すことになった。敗戦に伴い日本は連合国の占領下に置かれ、剣道は学校における教育、また部活動にいたるまで禁止され、関係団体の役員をしたものは公職追放処分を蒙るなど、弾圧を受けた。昭和27年(1952年)に講和条約が発効し、剣道の復興が始まった。各地で剣道連盟が組織され、「全剣連」が設立され復興のための活動が始まった。戦中の反省の上に立って、「スポーツとしての剣道」が宣言され社会復帰が始まった。

剣道は、義務教育となった中学校でも選択科目として行われるようになり、社会人を含め各地での稽古も盛んになり、各団体で大会も行われるようになった。これらに呼応し、「全剣連」は称号・段位審査を復活、試合審判規則も制定するなど基盤造りを進めた。スポーツの分野に位置づけて出直し、復活し、戦前の厳しい稽古は影を潜め、試合に熱中することになった。一方戦前ほとんど見られなかった女子の愛好者が激増し、現在に至っている他、小学生児童の愛好者も増加する普及が見られた。

この間剣道の内容自体は、伝統的なものが崩れず、温存復興された。全国で復興はみえたが、試合偏重のいわゆる「スポーツ剣道」が盛んになり、質の低下が憂慮された。本来の剣道に戻すべきとの活動により、審議の結果、昭和50

年(1975年)に以下の「剣道の理念」が制定された。この考えは、単に試合に勝つ、そのための訓練、養成に熱中することを、剣道の諸活動の目的にするべきでなく、長い人生に渡っての人造りのための錬成を行うべきであると「全剣連」は宣言している。

このような歴史的な流れから、今日の剣道の理念や指導のあり方が導き出されている。上記の宣言にもあるように、剣道をとおして文武の道を学ぶという日本人の自己修練の考え方を、全人教育および生涯学習の歴史として、装いを新たにしながら継承、発展させていくべきであるとしている。

筆者は、この歴史と経緯より、本来戦いの技法であった剣術が、生と死の極限状態より生まれた人としてのあり方、生き方として、剣の道すなわち人の道として体系化されたと考える。

2) 剣道の文化的特性

剣道の骨子は、あくまでも日本の伝統文化によって形成されてきたことにある。精神性においては、修業に当たっての修養と勝負の心構えを追及し、「礼の心」を重んずる倫理性を築いていることがあげられる。

稽古において、直面する「生死の場」を想定していることから、厳粛な「礼」が要求されている。「一刀」の意味は単に技を学ぶだけではなく、人間としての精神性を表すものとなっている。その「一刀」の思想を「一本」として、剣道の近代化の中に織り込んでいる。

スポーツは楽しみや健康を享受するものであり、剣道はその発生からして、「人が生きていくための指針」とするすぐれた全人教育の方法として確立されたものである。気の働きや心の闘いを伴った「気剣体の一致」した一本(有効打突)」を追求することが、生涯剣道に繋がっていくことになる。

このように完成された剣道を、以下の4つの文化的特性にまとめてみた。

① 「常行三昧」

仏教用語で悟りを求める修業をいい、たえず

身体を動かしつつづけながら、その身体運動の持続を手段として、心をしだいに澄みきった無心の状態へとみちびいていく方法である。

②「心と姿」

剣道は、伝承されてきた形を、繰り返し繰り返し修練することにより、その形に込められた深い、技、精神性などを、その時々、の精進に併せ、修得する事ができる。

③「事と理」

事は技法をいい、理は心法をいう。この事と理はどちらに偏ることなく一致させていかねばならない。事はできる理はわかる、ということで、事として、できることは、理として、わかっていること、事として、できなければならないということの意味している。したがって、わかることと、できることの繰り返しとは、不断の思念・工夫と身体修練を行うことである。

④「終生修行」

この終生修行は武道の世界の伝統である。剣道は、勝敗を争うという競技としてだけではなく、剣道場のみならず日常の生活の場においても修業道場として、「道」として、自己の心身を総合的に鍛錬してゆくことの過程に大きな価値がある。剣道は目に見えない価値観、達成感を求め、仏道に始まる道を求めるという考え方を基盤にしている。運動しながら、繰り返し思念・工夫するところに、生涯にわたり向上心の持続と健康管理を求めることにつながる。

以上の4つのバックボーンとなる特性から、剣道は人を活かす大きな機能を有していることがわかる。

このように、体を動かす事と同時に文武の道を通じて自己修練をするという剣道の考え方は、「正義」、「廉恥」、「礼節」(武の三則)の精神を学ぶことができ、人間形成を図り、そして国家社会を愛し広く、人類の平和繁栄に視野を広げる事ができる機能があると考えられる。

4. 「K 自衛隊少年剣道部」の指導方針と実態

1) 「K 自衛隊少年剣道部」の歴史

「K 自衛隊少年剣道部」の創立は昭和49年で、K 自衛隊駐屯地勤務のSE 師範が、現S 師範と共に、駐屯地自衛官の子供、近隣の子供(小学生)を集め指導した事にはじまる。当時、年間稽古日数は約150日であったが、現在は約60日である。累計部員数は1,100名をこえる。これまでの仙台市内外での試合(大会)成績は、平均大会規模50チーム中、優勝11回、準優勝13回、3位14回であり、個人の入賞者も数多い。

2) 「K 自衛隊少年剣道部」の指導方針

(1) 部訓

K 剣道部では、以下の「稽古三訓・五訓」を部訓として、キャプテンの先導に合わせ全員唱和し、防具を付け稽古をはじめる。指導者は、状況により引用し、技術と精神面の指導をおこなっている。

稽古三訓

(気) 気迫充分たる先(せん)の技

(剣) 打突部の確実たる技

(体) 姿勢正しく連続の技

五 訓

(1) 時間を守ろう

(2) 挨拶を元気よくしよう

(3) 履き物をそろえよう

(4) 一生懸命命稽古しよう

(5) 交通ルールを守ろう

(2) 指導方針

「K 自衛隊少年剣道部」の指導方針は、「鍛錬・文武両道」、「剣道で学んだものを家庭・学校で生かそう」と「稽古三訓」・「五訓」を基に、「基本重視」、「姿勢正しく綺麗な剣道」、「今の勝敗より将来への正しき剣道」を稽古の指針にしている。

S 師範に、剣道指導者として「幼少年剣道指導要領」(2001)の「第2章 剣道初心者指導の在り方」に基づき調査を行った。長年、子ども達を指導してきた言葉には説得力があり、「全剣連」(2003, P53)が引用している心理学者ソーンダイクの『学習の法則』と照らし合わせても

その効果は高く、かつ「剣道の理念」を実践していることがよくわかった。指導者・部員・保護者が三者一体となって稽古修練ができるようにすることが効果的である。

5. 「K 自衛隊少年剣道部」への入部動機と効果意識

1) 調査対象者の属性

調査対象者は、以下の表1) に示す、合計 32 名の保護者である。

表 1) 調査対象者 (子供) の属性

性別	現年齢	入部学年	在籍期間
男 23	9歳～36歳	小学1年 8	1ヶ月～6年半
女 7		小学2年 6	
不明 2	平均:20.1歳	小学3年 5	平均:3年2ヶ月
		小学4年 3	
		小学5年 2	
		小学6年 3	
		中学1年 1	
		不明 4	

2) 入部動機

西野ら (1978) の調査項目を参考に、「K 自衛隊少年剣道部」の入部動機に関する調査表 (質問紙) を作成した。回答は該当する項目にチェックを入れる方法とした。

また、この入部動機項目は以下の領域に区分される。

- ①子どもの事情：10 項目
- ②家族の者の剣道に対する意向：7 項目
- ③「K 自衛隊少年剣道部」に対する理解：13 項目
- ④子どもの身体面についての理解：12 項目
- ⑤子どもの精神面についての理解：10 項目
- ⑥子どもの将来に対する親の期待：9 項目

入部動機、および領域別の回答数および項目数で割った回答比率を算出したものが表2) および表3) である。

表 2) 入部動機

子どもの事情	動機1	動機2	動機3	動機4	動機5	動機6	動機7	動機8	動機9	動機10
子どもの事情	10	0	9	0	2	3	8	1	4	1
家族の意向	31.2%	0%	28.1%	0%	6.2%	15.6%	25.0%	3.1%	12.5%	3.1%
部への理解	9.4%	0%	15.6%	3.1%	15.6%	0%	9.4%	0	0	0
身体面	9.4%	12.5%	4	0	20	4	12	4	21.9%	3.1%
精神面	3.1%	0%	8.2%	0%	6.2%	0%	3.1%	3.1%	0%	0%
将来への期待	31.2%	12.5%	15.6%	3.1%	40.6%	18.8%	18.8%	6.2%	50.0%	25.0%

表 3) 入部動機に関する領域別の回答数および回答率

	回答数	回答率
子どもの事情	42	4.2
家族の意向	18	2.57
部への理解	66	5.08
身体面	8	0.67
精神面	10	1
将来への期待	143	7.53

表2) より、最も高い動機は、21「子どもの心身を鍛える事ができる」で 62.5%、次に 61「忍耐力のある子どもになってほしいから」、66「礼儀作法が身についた子どもになってほしいから」の 50%、また 65「責任感の強い子どもになってほしいから」、68「集中力のある子どもになってほしいから」(いずれも 43.8%)、25「スクールが比較的家の近くで開かれているから」、57「協調性のある子どもになってほしいから」(いずれも 40.6%) なども高い動機である。

表3) から分かるように、「子どもの将来に対する両親の期待」の回答率が最も高く、次に「K 自衛隊少年剣道部」に対する理解、「子どもの事情」の順である。子どもの身体面、精神面からの動機はほとんどないことが分かる。

表2) 3) から、両親は、「子どもの将来に対する期待」の中でも、身体や運動面ではなく、忍耐力や礼儀作法、また責任感や集中力などの精神的な資質の向上を願って剣道部へ入部させていること、さらに子どもの心身を鍛えてくれる部であることや比較的近所で参加料も安い (21.9%) という心理も加わり入部させているといえよう。

3) 効果意識

効果意識の項目も西野らを参考に作成した。ここでも該当するものにチェックを入れる方法とした。

効果意識に関しても、以下のような領域と項目数となっている。

- ①身体的健康や運動面について：24 項目
- ②精神面について：22 項目
- ③家庭生活面について：7 項目
- ④学校生活面について：11 項目
- ⑤入部後のマイナス面について：10 項目

効果意識、および領域別の回答数および項目数で割った回答比率を算出したものが表 4) および表 5) である。

表 4) 効果意識

	効果1	効果2	効果3	効果4	効果5	効果6	効果7	効果8	効果9	効果10	効果11	効果12
身体運動面	効果13	6	5	2	16	0	12	10	14	16	7	14
	効果14	15	6	3	50	25	32	31	43	50	21	43
	効果15	18	6	3	3	3	3	4	2	16	3	0
	効果16	25	8	3	3	9	4	6	2	34	0	4
精神面	効果17	3	3	11	1	4	3	3	3	3	3	6
	効果18	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果19	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果20	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
家庭生活	効果21	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果22	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果23	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
学校生活	効果24	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果25	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果26	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
マイナス面	効果27	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	効果28	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

表 5) 効果意識に関する領域別の回答数および回答率

	回答数	回答率
身体運動面	80	3.33
精神面	101	4.59
家庭生活	19	2.71
学校生活	32	2.91
マイナス面	9	0.9

表 4) から、効果意識で最も高いものは、40 「礼儀作法が身についてきた」(50.0%) で、次に 21 「剣道が上手になってきた」(40.6%)、18 「体力がついてきた」(37.5%)、27 「友だちが増えてきた」、28 「協調性が出てきた」(いずれも 34.4%) などである。また 41 「ルールやきまりを守るようになってきた」(28.1%) や 14 「体格がよくなってきた」、52 「剣道の放送等を家族ぐるみで見えるようになってきた」(い

ずれも 25%) など効果があったとして指摘されている。

表 5) から、「精神面」の効果が高く、次に「身体的健康や運動面」の効果があったことがわかる。逆にマイナス面を指摘する両親はほとんどいなかった。

4) 入部動機と効果意識の対応関係

入部動機と効果意識両者の対応関係をみるために、同じ項目についてその関係を検討した。対応関係にある項目は、体力、運動面、および精神面に関する以下の 14 項目であった。

表 6) 入部動機と効果意識の対応関係

協調性	体力	体格	運動能力	忍耐力	積極性	明るい性格	責任感	礼儀作法	集中力	集中力	指導力	謙虚さ
効果29	13	6	5	2	16	0	12	10	14	16	7	14
効果30	40	18	15	6	3	50	25	32	31	43	50	21
効果31	11	12	8	3	3	3	3	4	2	16	3	0
効果32	34	37	25	9	4	9	4	6	2	50	9	0

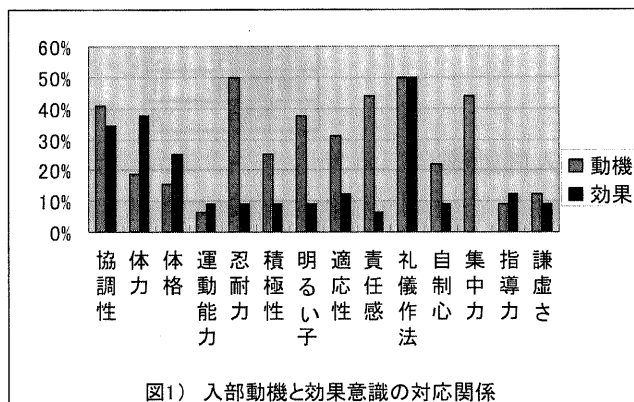


表 6) および図 1) より、精神面の動機と効果を見ると、剣道部という特性と関連すると思われるが、回答比率より、保護者は礼儀作法および協調性は、動機とほぼ同じ効果が得られたと感じているようである。しかし忍耐力や集中力など、その他の精神面に関しては、動機ほどの効果が得られなかったとみることができよう。一方で、体力や体格、運動能力では、動機は少なかつたものの動機以上の効果を指摘しており、部に参加することによって、結果として身体・運動面での効果が現われているといえる。今回は対象者が少なく、在籍期間の長短による比較の一般化はできないが、調査対象者の在籍期間が長いほど、礼儀作法や協調性以外の精神面の効果も指摘する傾向がみられ、今後、検証したいと考える。

32名という対象者ではあったが、保護者の入部動機は、「K 自衛隊少年剣道部」の人間形成という指導方針に適合し、また今回の調査では十分とは言わないまでも、礼儀作法や協調性に代表されるように、それなりの効果も指摘され、仮説の一部が検証されたといえよう。

本研究で参考とした西野ら（1978）の調査においても次のような結果が得られている。

- ①子どもをラグビースクールに入校させた親の動機は、子どもの年代とあまりかかわりなく、ある共通した傾向が認められる。それは将来必ずしもラグビー競技者にしようとするものではなく、むしろ一般的にスポーツマンが持合わせているような心身の資質や特性を獲得させてやりたいと願う親の期待からのものである。
- ②効果意識については、主に身体的健康や集団内での適応性に関する領域について、一応効果を認めているようである。

ラグビーと剣道、調査対象人数の違いはあるが、身体的健康や集団内での適応性に関する領域など、心身の効果を認めており、本研究結果と同様であるといえる。

6. 総括

1) 研究のまとめ

わが国には、日本文化の特徴である「武士道」という、ものの見方、考え方がある。かつて「侍」が生死を越えた行動規範と精神のあり方に正しく生き抜き、打ち勝ち、そして成長・発展・拡大し「武士道」を見出した。現在、この「武士道」は剣道の中に脈々と受け継がれている。そして、この剣道にこそ迷える現代人に光明を見出す「道」がある。「遊び」を起点とするスポーツと異なる、日本古来の「求道精神」を受け継いだ剣道は、剣道独自の競技特性を通じて、伝統的文化を学習し、文武の「道」を通じて日本人の自己修練の考え方を学ばせようとするものである。更にこの思考は、全人教育及び生涯学習の有り方を説いている。

剣道は、「全剣連」の指針に沿い指導者が実

践に移し照らし合わせ進めていくことが肝要である。特に初心の間の指導が大切である。「全剣連」では、剣道を通して文武の道を学ぶという古来日本人の自己修練の考え方を継承推進している。剣道の修練は、自己の確立であり、ひいては人類繁栄に寄与する事に繋がる。剣道は競技だけではなく、様々な特性を持つ「道」として自己を修練し、人間形成に大きな役割を果たし、生涯学習として今日的意義を持つ。剣道の修練は、師弟同行の教育である。少年剣道には、三者一体の気風が重要である。

2) 今後の課題

剣道の流布に繋がる、三者一体の気風を促す考案をしたい。剣道の精神「武士道」は、様々な特性を持ちあらゆる「道」として効果を現す。「武士道」を現代人に理解できるようにまとめ体系化し、あらゆる立場の人の生きた学問・道標に活用できるようにしたい。

7. 提言

緒言で記した内容の危惧がいつ起きるとも限らない状況である。私たち大人は、将来このような厳しい社会に出て行く青少年達にその心構えを伝えられているだろうか。大人と子供の関係はこれでよいのだろうか。

憲法に日本人の最小限の義務として、「教育・労働・納税」の実行が記されている。民主主義社会で自由や権利の「個」を主張する風潮があるが、それは、あくまでも「公」の義務を遂行してからこそであると考ええる。果たして、社会人の中でどれだけの人がその義務を理解しているであろうか。

戦後の日本で、「民主主義」が尊ばれ、わが国で古来培ってきた、「公」と「個」をわきまえた世界観・社会制度が否定されつつあり、伝統的な縦関係（師弟・家長制度による教育指導システム）、口伝を重んじる「剣道」をはじめとする、その純日本思想の「道」を歩まんとする「求道精神」も失われつつあるように感じられる。

その「民主主義」も、青少年の育成課程において、親も未熟な子供たちを成熟者と同じ扱いをするなど、取りちがえているように感じられる。大人が子供に対し過度の体罰を与えることを、「虐待」と言っているが、将来「公」的社會に適合できないように、大人が子供に対する過保護・放置的な育て方も「虐待」と言えるのではないか。前述の社會問題を痛感しているはずの大人は、残念ながら未来を託す子供達を育成するという社會人としての役割を果たしてはいないと思われ、親子共々行き詰っているのではないかと考える。今こそ「剣道」による「人間形成の道」が指針として求められると思う。

人間は、本来動物的、本能的な私利私欲が強く、自己中心的な欲望を持ち合わせている。「道」の理念は、本当の人間らしく生きるため、動物的本能を抑え、理性と愛情で他をつつむところにある。冒頭、緒言にて危惧した青少年の将来に対し、また人として正しい「道」を教育する道德教育も、教室で知識として教えればよいというものではなく、身体運動を通して実践的に理解させ身に付けさせる、つまり体得させることによって、教えることができる。われわれの身体と心、実践と認識はひとつである。また、躰教育なども、親は、学校や他の場所にまかせるべきものではなく、当然、家庭で行わなければならないと思う。人として真実に生きるためには、正しい道を知らなければならない。

「人間は何のために生きるのか」、「人間はどうあればよいのか」、「人間の幸せとは」など、根本的な目標が解決されないままである。大人にその迷いがあり、次代を担う子供達にも語れないでいる。剣道には、武の三則などの「武士道の徳目」があり、今般、文科省においても必須科目となったことからわかるように、剣道は人間教育の有効な手段として注目されている。

武士道とか仏教（宗教）と言うと、現在では抵抗感をもたれることが多い。武士道というと、佐賀藩士山本常朝の著書『葉隠』に記されてい

る、冒頭第2条の「武士道と云は死ぬ事と見付たり」という一文が有名である。生への執着を捨てることを説いているが、こういった思想は軍国主義に繋がる考え方として誤解され敬遠されてきた傾向があった。実際は「決定的瞬間には、一身の利害を唱えることなく身を処する。非常時の覚悟で平常時の時の勤めを果たせ、その為にも、非常の際には無条件で身命を捧げる決意を固めておかなければならない」（2006, P48）と解釈すべきである。

「温故知新」日本の歴史の中に、将来の世界を創造する「個」と「公」をわきまえた青少年の育成とそれを掌る人の「道」があるのではないか。

引用・参考文献一覧

- 1) 浅見裕・岡島恒・木原資裕・武藤健一郎 (1999)「剣道指導者の剣道に関する意識についての一考察-学校指導者と道場指導者の比較-」武道学研究第32巻, 第1号, P26.
- 2) 井上正孝 (2003) 人生に生きる五輪の書, 体育とスポーツ出版社, P8.
- 3) 岡島恒・浅見裕・植原吉朗・大久保照雄・木原資裕他 (1997)「道場に通う小学生の剣道に対する意識-剣道の試合実績と練習頻度による意識の違い-」武道学研究第29巻, 第3号, P36, P41.
- 4) 倉沢行洋 (1987) 芸道の哲学, 大阪東方出版.
- 5) 「月刊剣道日本」(1993)第18巻, 第3号, -全国180の道場指導者に聞いた、現場の「今」- 解説宮沢美一, 全剣連事務局長, P26, P28-29, P46.
- 6) 財団法人全日本剣道連盟 (2001) 幼少年剣道指導要領「改訂版」, P10-16.
- 7) 財団法人全日本剣道連盟 (2003) 剣道体育教本「改訂版」, P4-20.
- 8) 財団法人全日本剣道連盟 (2008) 剣道指導領 (初版), 刊行に当たって, 「全剣連」会長 武安義光, P10.
- 9) 染谷和巳 (2003) 平成社員道, プレジデント

社.

- 10) 染谷和巳(2002)「鬼」とならねば組織は動
かず, プレジデント社.
- 11) 中林信二(1987) 武道のすすめ, P134,
P148, P155, P198, P199, P216, 中林信二先生遺
作集刊行会.
- 12) 鍋山隆弘(1998) スポーツの知と技-トップ
アスリートへの軌跡-, 大修館書店.
- 13) 新村出編(1998) 広辞苑第五版, 岩波書店.
- 14) 西野泰広他(1978) ラグビー・スクールの入
校動機と効果意識に関する研究, 体育学研究
第23巻 第3号.
- 15) 野中 日文(2000) 武道-日本人の行動学, 創
言社.
- 16) 丸山富雄(1981) 日本の一流競技者のスポー
ツ観構造について, 日本人のスポーツ観分析の
ための一試論, 仙台大学紀要第13集.
- 17) 宮本武蔵, 大倉隆二訳(2004)「五輪の書」
草思社, P123, P133 他.
- 18) 文部省(1993)「学校体育実技指導資料 第2
集 柔道指導の手引(改訂版)」東山書房, P2.
- 19) 山本常朝・田代陣基, 編訳 神子侃(2006)
新編葉隠, たちばな出版, P48.